

映画史における日本と中央アジアの関係


<https://doi.org/10.24412/2181-1784-2022-22-58-61>

梶山 祐治 KAJIYAMA Yuji

筑波大学 国際局 グローバル・コモンズ UIA

本稿では、ソ連・中央アジアの映画において日本がどのように描かれてきたのか、その表象について指摘するとともに、映画史における流れを整理することが狙いである。まず、映画が発展した 20 世紀の大部分において中央アジアはソ連の一部であった事実を踏まえ、初めにソ連映画における日本の表象について見た後、1990 年頃から登場してくる中央アジア映画の具体的な例へと移っていく。

第二次世界大戦においてソ連はナチス・ドイツとの戦争に勝利したが、その被害は甚大で影響は映画産業にも及び、製作本数は大きく落ち込んだ。中央集権化を進めたスターリンの死後に雪解けが訪れると、その自由な雰囲気は映画界にも伝播していき、映画産業は急速に復興・成長していく。1950 年代後半からそれまでになかった様式・テーマを持った作品群が登場し、やがてそれらの映画はソ連ヌーヴェル・ヴァーグとも呼ばれるようになった。まさにこうした映画に日本や日本人もそれまでになかった新しいかたちで登場し、ソ連の観客がスクリーンで「再発見」していったのだった。例えば、ゲオルギー・ダネリヤの大ヒット映画『モスクワを歩く *Я шагаю по Москве*』(1964) に登場する日本人観光客がいる。ロシア語の分からないこの日本人はタクシーに乗って運転手と英語での意思疎通を試みるが、運転手は英語が分からず意思の疎通ができない。そこで運転手は本作の主人公たちに助けを求め一緒に同乗させるのだが、彼らも英語が分かるわけではなく、ちぐはぐな会話場面が展開する。ここで日本人であることの必然性はなく、この日本人は単に世界有数の大都市であるモスクワを訪れた外国人のひとりとして登場している。

日本の表象ということを見ると、スクリーンに登場する日本人だけでなく、日本の歌が流れる場面も注目に値する。1970 年代にキルギス映画界を牽引したボロトベク・シヤムシエフの TV 映画『愛の木霊 *Эхо любви*』(1974) には、ラジオ放送から流れる曲として、皆川すすむの世界的に大ヒットした『黒ネコのタンゴ』(1969) が流れる一場面がある。ソ連の観客はこの歌詞の意味をほとんど理解できなかったと推測されるが、歌詞とこの場面との雰囲気は不思議に一致しており、外国文化の流入が進んだ雪解けを経た時代だからこそあり得た演出場面となっている。同時期、同じくラジオで流れソ連で一躍有名になった曲にザ・ピーナッツの『恋のバカンス *Каникулы любви*』(1963) がある。ウズベキスタンを代表する雪解け期の作品であり、国外の曲が多く登場するエリヨル・イシムハメドフ『やさしさ *Нежность*』の冒頭では、主人公たちがこの曲をロシア語で歌っている。この曲はロシア人歌手ニーナ・パンテレーエワによるカバーがヒットしたこともあって、今でもロシアでは国産の曲だと思っている人が多く、ロシア語版は現代に至るまで同国の映画で広く使用される楽曲になっている。

日ソ合作映画が製作され始めるのはこの頃からである。1966 年には、『地獄門 *Врата ада*』(1953) がカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した衣笠貞之助が、エドゥアルド・ボチャロフと共に監督した初の日ソ合作映画『小さい逃亡者 *Маленький беглец*』が製作されている。父親がソ連にいと聞いた日本人孤児がソ連船に乗って密航してナホトカに渡り、父親を探す旅を描いた。

ソ連映画に登場する日本人という観点から見たとき、特別な地位を占めているのが栗原小巻である。アレクサンドル・ミッターと吉田憲二による共同監督作品『モスクワわが愛 *Москва, любовь моя*』(1974)では、ボリショイ・バレエで踊ることを夢見る日本人女性のヒロインを、自身バレエ経験のある彼女が演じた。栗原小巻は、ロシア人ピアニストと日本人女性とのラブストーリーを描いたセルゲイ・ソロビョフと西村潔の共同監督作『白夜の調べ *Мелодии белой ночи*』(1978)でも主演を演じ、アレクサンドル・ミッターの大ヒット映画『エア・パニック—地震空港大脱出— *Экипаж*』(1979)でもまた、東の間だが日本人乗客として出演するなど、ソ連映画に出演し続けた日本人女優として特異な存在だった。1990年には、再びアレクサンドル・ミッター監督作『未来への伝言 *Шаг*』に主演し、ポリオ(脊髄性小児麻痺)で息子を失い、ソ連からのワクチン輸入に奮闘する女性を演じた。1980年には、モスクワ五輪に合わせて製作された佐藤純彌『甦れ魔女 *Путь к медалям*』という日ソ合作映画がある。周知のように、モスクワ五輪には日本や西側諸国はボイコットしたため、この作品はあまり注目を集めることはなかった。なお、佐藤純彌の兄は日本のロシア語学者として著名な東京大学名誉教授の佐藤純一で、ロシア語の教科書を多数著している。その後、佐藤純彌は『おろしや国酔夢譚 *Сны о России*』(1992)で、18世紀末に船で遭難してアリューシャン列島に漂着し、エカチェリーナ2世に許可を得て9年半後に帰国した大黒屋光太夫の物語をレンフィルム協力のもと映画化した。

ソ連崩壊直前の1990年、アゼルバイジャンでセルゲイ・ラトニコフ『「ヤポン」と日本人 *«Япон» и японец / «Япон» в япониях*』という短編作品が撮られている。日本は製作に名を連ねておらず、日本人の出演者もないこの作品では、ウズベキスタン生まれの朝鮮系ロシア人俳優エドゥアルド・パクが日本人の役で主演している。パクは、ソ連・中央アジア映画で度々日本人を演じた。太平洋戦争も終盤に差し掛かった1944年、神風特攻隊のひとりであるパイロットが航路を外れ、カスピ海沿岸の漁村に不時着する。そこには「ヤポン=日本人」とあだ名されたアゼリ人の青年が住んでいて、日本人を追ってやって来たNKVD(内務人民委員部)にこの地元の青年が追われることになる。意図的に荒唐無稽を志向した物語は、ユーモアとエネルギーに満ちたファルスを得意とするアゼルバイジャンを代表する映画監督ヴァギフ・ムスタファエフの脚本によるものである。日本軍人を描いた作品としては他に、ウズベキスタンでバホディル・ユルダシェフ『島 *Shima*』(2007)が撮られている。終戦を知らず、20数年にわたってフィリピンのルバング島で潜伏を続けた旧陸軍少尉の小野田寛郎の存在にインスピレーションを得て、多くの朝鮮系ロシア人が参加して製作された。1975年、まだ戦争が続いていると信じる人間が住む島を舞台として、消息を絶った父を探す日本人ジャーナリストが戦争の狂気に直面し、日本人に関するステレオタイプを過剰に提示する作品である。

遠い極東の島国の軍人が非現実的なプロットとともに描かれるのに対して、かつて中央アジアで強制労働に従事した事実がある日本人捕虜は、映画の中でより綿密に描写され温かい眼差しが注がれている。ソ連が崩壊して間もないカザフスタンで製作されたサケン・ナリムベトフ『小さなアコーディオン弾き *Жизнеописание юного аккордеониста*』(1994)は、戦後のカザフスタン南部の炭鉱町を舞台にした作品で、炭鉱で働く捕虜としてエドゥアルド・パク演じる日本人が登場し、アコーディオンを得意とする少年の一家から食事に招待されるなど、心温まる交流が描かれている。捕虜はカザフ人一家に対して日本の歌を披露するなど両者は親しく交わるが、かつての敵国の人間に優しさを示す父親の態度は問題視され、彼は子供の目の前で逮捕されてしまう。日本人捕虜が描かれている作品としては他に、第二次世界大戦後の極東の炭鉱町を舞台にしたヴィターリー・カネフス

キー『動くな、死ね、甦れ！ *Замри, умри, воскресни!*』（1989）があり、ここでの日本人捕虜は寒さの厳しいより過酷な労働環境下に置かれている。

日本とロシアの合作映画が数多く製作された時期を経て、1990年代になると日本と中央アジアの共同製作作品が出現してくる。背景には、経済的に落ち込んでいた中央アジア諸国と対照的にバブル経済を迎えていた日本という両国の関係が前提としてある。当時、中央アジアではフランスやドイツ資本の映画も多く製作されたが、日本はタジキスタン出身のバフティヤル・フドイナザーロフの初期3作品『少年、機関車に乗る *Братан*』、『コシュ・バ・コシュ：恋はロープウェイに乗って *Кош ба кош*』、『ルナ・パパ *Лунный папа*』の共同製作国に名前を連ね、この映画作家が世界に羽ばたくのを後押しした。

日本の表象という観点からは、1990年代以降の映画作品中に登場する Sony や Panasonic といった日本製品の例も指摘することができる。多くの外国製品がロシア映画のスクリーンに浸食している様子がわかるアレクセイ・バラバーノフの大ヒット映画『ロシアン・ブラザー *Брат*』（1997）では、主人公は Sony の携帯型 CD プレイヤーを常に持ち歩き、恋人には Panasonic のビデオデッキをプレゼントしている。中央アジアの例では、ウズベキスタンの映画監督ズリフィカル・ムサコフによる全編がスピルバーグへの語りかけで進行する奇想天外な SF 映画『UFO 少年アブドラジャン *Абдулладжан, или Посвящается Стивену Спилбергу*』（1991）において、ブルース・リーの真似事をする少年がポーズを決めて意味不明に「パナソニック」と呟く場面が存在する。この場面では、ペレストロイカ期に接触が始まった外国製品へのウズベク人の直接的な反応が映像化されている。さらに、不思議な能力を持つアブドラジャンによって彼が身を置くコルホーズで低価格のビデオテープレコーダーの生産が始まり、商売敵である日本人ビジネスが涙を流してニュースのインタビューに答える映像が流されるなど、この映画にはペレストロイカ期に変化しつつある中央アジアの姿を記録した映像として興味深い点を多く観察することができる。

ムサコフは、日本で初めて開催されたウズベク映画の映画祭であるウズベキスタン映画祭 2002 で同国の代表として来日し、日本との縁も深く、『I wish... *Я хочу*』（1999）と『オイジョン（母） *Oyijon*』（2001）の2つの日本・ウズベキスタン合作映画も撮っている。特に後者は、日本人女性とウズベク人女性の国境を越えた親交が描かれ、ウズベキスタン映画として初めて日本ロケを敢行した作品としても知られている。なお、2003年には、日本で人気マンガを原作にした飯田譲治『ドラゴンヘッド』が、日本映画として初めて全篇2ヶ月にわたるウズベキスタンでのロケーション撮影によって撮影されている。日本とウズベキスタンでは、同時期に相互の国の風景がスクリーンに表象されていたという、映画史的な事実を指摘することができる。

近年、日本と中央アジアの間では、ますます緊密な関係のもとでの作品製作が行われている。竹葉リサとエルラン・ヌルムハンベトフの共同監督による『オルジャスの白い馬 *Конокрады. Дороги времени*』（2020）は全編カザフスタンで撮られた作品である。カザフ人俳優に混じってただひとり日本人俳優の森山未来が主人公のカザフ人を演じ、中央アジアとの新しい共同製作の例を示したこの作品は、日本では映画祭での上映を皮切りに劇場公開されて高く評価された。

近作で特に注目しているのが、日本とウズベキスタンの国交樹立 25 周年とナヴォイ劇場完成 70 周年の節目に製作された黒沢清『旅のおわり 世界のはじまり *Конец путешествия, начало мира*』（2019）である。日本の TV 番組の撮影クルーとともにウズ

ベキスタンを訪れるレポーターの葉子を前田敦子が演じ、日本人とウズベク人の間に立つ通訳として、1ヶ月間日本語を特訓したというアディズ・ラジャボフが流暢な日本語を披露している。葉子は、迷い込んだナヴォイ劇場で歌のリハーサルを聞いたことを契機として、歌手になりたいという本来の夢を思い出す。そして、買い物に入った商店などで地元の人間とのコミュニケーションを徹底的に拒否していた彼女は、バザールで撮影禁止区域を撮影していたところを警備員に咎められ、その場から逃げ出したために追われることになる。捕まった警察署で「あなたたちはどうして、私たちの話を聞こうとしないのですか」「話し合わなければ、知り合うこともできないのではないですか」と諭されると、それまで地元の人間と一切コミュニケーションを取ろうとしなかった彼女は泣きじゃくり、それ以降に映し出される彼女の清々しい様子からはその内面にも変化が生じたことがわかる。映画のラストシーンでは、葉子自ら「心の底から湧き上がる感情がないと歌えない」と語っていた歌を披露する。この映画では、観光立国であり日本人観光客も多く訪れるサマルカンドを舞台としながら、世界遺産のレジスタン広場をはじめとするウズベキスタンの風光明媚な場所にはほとんど関心が払われていない。外国人から好意的に受け取られやすい映像の代わりに提示されるのは、TVレポーターとして視聴者が求めるセリフをただ喋らされていた葉子が自分の言葉を獲得していく過程でその変化を促すことになるウズベキスタンとそこに暮らす人々である。中央アジア諸国の独立から30年近くを経て製作されたこの作品では、固定観念や国境の枠組みからは自由な日本とウズベキスタンの交流が描かれている。